

## 衰えたかブラジルの成長力 金融大手が悲観レポート

2013/07/13 06:00 日本経済新聞電子版セクション 1299文字

ブラジルの成長力は衰えてしまったのか。そんな議論が注目を集めるようになってきている。2013年の実質経済成長率は2%強にとどまる見通し。中国など新興国の需要に支えられた資源輸出は陰り、国内産業も輸入品に押されてパッとしない。景気低迷下で物価は上昇基調を強めており、政府は対応に苦慮する。今年は特別な年なのか、そうでないのか。

気になるレポートが手元にある。題名は「2020年のブラジル 課題山積」。ブラジル金融大手のイタウグループが4月に発表したものだ。

20年までの経済成長率見通しを眺めると、最も高いのが14年の3.5%。後は軒並み2%台後半の数字が並んでいる。

中銀が民間エコノミストの予測を毎週まとめる「フォーカス」によると、13年の成長率は2.34%だ。8週連続で見通しは下方修正されている。その今年とさほど変わらない水準が20年まで続くというのだ。

イタウがやや悲観的とも取れるレポートを出したのはなぜか。背景には「労働力の拡大が経済成長のけん引役の1つとはなくなる」ことがある。

同レポートによると、ブラジルの労働人口増加率は94～97年には1.7%前後だったが、12年には1.2%に低下した。イタウはそれが20年に0.9%に下がると見込んでいる。国内総生産(GDP)成長率への寄与率で12年の0.3%から0.2%に下がる。

人口の伸び率の低下を補うには、生産性の向上と投資の増加が必要だとレポートは訴える。ブラジルはGDPに占める投資の比率は12年で18%と、他の新興国に比べて低い。早急に「20%に引き上げなければならない」と指摘する。

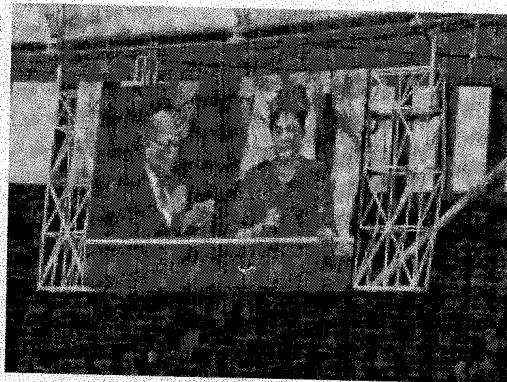
生産性についても「改革が欠如しており、ゆるやかにしか上昇しない」と政府の対応に批判的な姿勢を示す。

他の市場関係者も同様の点を指摘する。例えば、格付け会社のスタンダード・アンド・プアーズ(S&P)だ。6月6日に現状では「BBB」の国債の長期格付け見通しを「安定的」から「ネガティブ」に引き下げた。

今後2年での格下げの可能性にも言及したのは「政府が投資家の信用をくじくような政策」を打ち出していると判断したからだ。

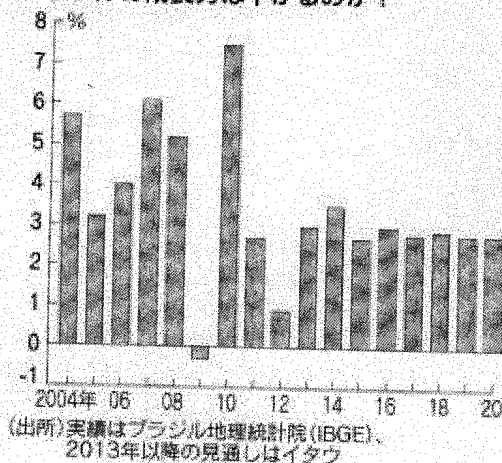
ではブラジルが生産性向上と投資をひき付けるための施策とは何か。企業に多くの資料提出を求める官僚的体質、複雑な税制、インフラ不足といった「ブラジルコスト」の解消を進めることがその答えだろう。

6月に全国で繰り返された政府に反発する抗議活動。そのデモ参加者が求めているのも「政府の効率性の向上だ」と、サンパウロ大学のジョゼ・モイセス教授(政治学)は指摘する。「医療や教育により資金が使われるのはもちろん望ましい。だが問題は、資金の流れに不透明な点が多く、効率的に使わ



ルセフ大統領(右)はサッカー・コンフェデレーションズカップの開幕式で観客からプーイングを受けた(6月15日、ブラジリアの国立競技場)

ブラジルの成長力は下がるのか?



れていないことだ」と分析している。

今のところはブラジルコストの解消には悲観的な見方が多いのかもしれない。ルセフ大統領が再選を目指す大統領選挙は14年10月に迫ってきている。野村証券のトニー・ボルポン氏は「14年末までは政府は痛みを伴う決定を避ける」とみる。ブラジル政府が痛みを避けたままだと、イタウのシナリオが現実味を帯びてくる。(サンパウロ＝宮本英威)

---

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報(以下「情報」)の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights ©2013 日本経済新聞デジタルメディア Nikkei Digital Media, Inc. All Rights Reserved.